

## 土の器——調査資料——

飯郷友康

蘆屋蘆村『ふしぎな麦束』（一九二四）の成立過程を、さきに考証した<sup>①</sup>。近代日本児童文学とユダヤ文学は、意外と複雑に関係するかもしれない。同様の例は見られるか。この度は、蘆屋蘆村の「お伽噺」を含む、大日本雄辯會講談社（現、講談社）『修養全集』第4巻『寓話 道話 お伽噺』（一九二九）の全体を調査する。

『寓話 道話 お伽噺』は、三部構成の詞華集（アンソロジー）で、第一部の「寓話篇」に95話、第二部「道話篇」に54話、第三部「お伽噺篇」に18話、計167話を収める。

うち119話には、文末に執筆者の氏名を記載する。担当話数の多い順に、蘆谷蘆村（全33話を担当。内訳は「寓話篇」の32話、「お伽噺篇」の1話<sup>②</sup>）、新山泰治（14話。うち「寓話篇」7話、「道話篇」7話<sup>③</sup>）、加藤咄堂（13話。全て「道話篇」<sup>④</sup>）、楠山正雄（8話。うち「寓話篇」7話、「お伽噺篇」1話<sup>⑤</sup>）、中村博道（7話。うち「寓話篇」2話、「道話篇」5話<sup>⑥</sup>）、加藤峻（5話。うち「寓話篇」2話、「道話篇」3話<sup>⑦</sup>）、藤村一郎（4話。うち「寓話篇」1話、「道話篇」3話<sup>⑧</sup>）、尾關若二（3話とも「寓話篇」）、安藝愛山（3話とも「道話篇」<sup>⑩</sup>）、小川未明（2話とも「お伽噺篇」<sup>⑪</sup>）、菊池寛（2話とも「お伽噺篇」）、濱田廣介（2話とも「お伽噺篇」）、赤松月船、芥川龍之介、木村泰賢、野邊地天馬、松村武雄（以上5名「寓話篇」各1話<sup>⑫</sup>）、東胤徳、小酒井不木、高島米峰、中尾未承、眞下醒客、本山荻舟、八波則吉、山中峯太郎（以上8名「道話篇」各1話<sup>⑬</sup>）、秋庭俊

彦、安倍季雄、大木雄三、奥野庄太郎、大原麟太郎、甲斐静也、北村壽夫、清見陸郎、久米元一、千葉省三（以上10名「お伽噺篇」各1話）。

その他48話のうち、「寓話篇」の19話と「道話篇」の12話には文末の括弧内に出典のみ記載（「百喻経より」12話<sup>⑭</sup>、「ヴィシヌヌ・サルマン物語より」6話<sup>⑮</sup>、「新約聖書馬太伝より」1話<sup>⑯</sup>、以上「寓話篇」。また「通俗教育道話より」6話<sup>⑰</sup>、「鳩翁道話より」2話<sup>⑱</sup>、「続鳩翁道話より」1話<sup>⑲</sup>、「賣卜先生安楽伝授より」1話<sup>⑳</sup>、「民の繁栄より」1話<sup>㉑</sup>、「長命になる伝授より」各1話<sup>㉒</sup>、以上「道話篇」）。

残る「寓話篇」17話のうち、7話には文末の括弧内に原作者の名前のみ記載（「レッシング物語より」4話<sup>㉓</sup>、「ソログープ物語より」1話<sup>㉔</sup>、「クローロフ物語より」1話<sup>㉕</sup>、「ガッテイー女史による」1話<sup>㉖</sup>、以上「寓話篇」）。あと10話には執筆者、原作者、出典を記載しない（題名『鴛鳥の自慢』『守法書』『牧童と野山羊』『奴隸と獅子』『二人の旅人と斧』『子供といら草』『牝山羊の髯』『子供と蛙』『屋根にのぼった驢』『木像を運んだ驢』。以上、掲載順）。そのうち1話はクルイロフの創作、1話は漢籍の故事、1話はローマ古典の奇談<sup>㉗</sup>、7話は「イソップ寓話」に拠ると思われるが、実際の取材源、訳者および翻案者は不明である<sup>㉘</sup>。

ここで、第一部「寓話篇」冒頭の「寓話に就て」と題した無記名の小文を参照したい。新字体新仮名遣いに改めて、以下に引用する。

犬や驢が、人間と同じように語ったり、鴉が蟹に人間と同じよう

に話しかけたりするのが寓話の世界である。ここでは、仙人や、魔法使が出て来たり、沼の精や、幽霊が出て来たりして、極めて自然に行動し、又語っている。こんな不思議な世界は、勿論この世では永久に見出すことは出来ないだろうが、寓話やお伽噺の世界に於ては、鶏が驚くべき哲学者であり、蟻が敬服すべき勤労者であり、又猫が物識りの大先生でさえあり得る。

そして、これ等の物語りはいずれも、諸種の教訓とか暗示とかの寓意を含んで、人間の世界に呼びかけている。吾々の純朴な祖先達の頭から、こういう興味ある形をとった寓話が生み出されて、処世上の教訓として残されたということは、真に面白いことで、老若男女、誰にも面白く、解り易く、しかも有益な物語りとして伝えられ、教育上の最もよい教訓の器として盛に用いられて来たのも、決して偶然のことではない。これ等の物語を通して、自然に生み出される同情同感から、極めて自由に、力ある道義性の覚醒を促し、読者の心に何物かを印象しようとするのが、本書編輯の目的である。

世界に寓話は極めて多い。就中最も有名なものとしては、ギリシヤに生まれたイソップの寓話と、印度のパンチャタントラ、及びヒトデパーシヤという二つの寓話であつて、後世の寓話には、これらのものから材料をとったものが甚だ少くない。フェードルス、アヴィアヌス、ラフォンテーヌなどは、その例であり、最も独創的のものとしては、クロイロフ、ソログリーブ等がある。

しかし、道徳観念の如きも、時代と共に常に変遷するものであるから、卓れた寓話として古典的価値を有するものであつても、直に現代人の採つてもつて修養の資とするに縁遠いものは本書には採らなかつた。

本書は、以上の寓話は勿論、広く世界各国の寓話中より材料をと

り、或は物語をそのまま翻訳したものもあり、或は自由に書き改めて殆んど原型を脱したものもあり、或はこれらの寓話から受けた暗示に誘われて創作したものもあるが、要は世界各国の代表的な寓話を、洩らさぬようとの用意と、現代人に適切な教訓を与えるものを選択することに全力を注いだつもりである。

以上。もともと「本書」すなわち『寓話 道話 お伽噺』の総序を意図した編集主幹（あるいは、主幹に近い人）の文章であろう。事実上の主幹は、執筆担当の話数から推測するに、おそらく蘆屋蘆村か。推測の根拠として、本書の第二部「道話篇」第一話、加藤咄堂『道話の由来』を、以下に引用する。原文を新字体新仮名遣いに改めた。

『道話』とは道の話。

道を話すは古聖先賢の仕事、釈迦の説法も、孔子の教訓も、基督の布教も、ソクラテースの街頭演説も、これ皆な道話であるが、それが、年月が経つに従つて、語もむづかしく、理屈もいろいろ唱え出されて、専門に研究せねば解らなくなつたものであるから、どうかして、これを一般の民衆に解らせようとの工夫から、昔の高僧碩徳が、さまざまの譬喩話を用いて説き出されたのが、今いう道話の起源である。

我が国では、早く平安朝の末頃から、仏教の方には此道話めいたものがあり、鎌倉時代を経て足利時代に入り、法話語録類の中に、其の教材に供せられたものも見出されるが、徳川時代になつてからは、儒教の方でも此通俗訓話があり、これを更に一般化して、専ら通俗平易を旨として直接大衆を相手に話し出したのは石田梅巖（名は勘平）で、今からザット二百年ほど前に、丹波の国の農家に生れ、京都の商家に丁稚小僧に雇われながら学問を修め、神儒仏の三教を一丸とし、これを心の上の道に求めて心学というものを組み立て、

それを通俗に説き聴かしたのが初まりで、其の初めて京都に道場を開いて、

『席銭、入り申さず候』

無縁にてもお望みの方々には御遠慮なくお通りお聞きなさるべく候』

と貼り出したのは今日でいう傍聴無料、聴講歓迎の濫觴。此梅巖の弟子に手島堵庵があり、其の弟子の中澤道二という人が、江戸へ乗り出して、市中の八さん熊さんを相手に、

『なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍するが堪忍』

なぞと説き出したので、頗る民育に功ありとして、時の老中松平越中守定信が扶持を与えようとしたが、公儀の保護は一切受け申さぬと辞し、専ら民衆相手の奮闘、それで此心学道話というものがズツと拡がり、今日、道話といえは直に心学のこととまで思われるに至ったが、其の實、道話というのは心学よりもモット広い意味を持つものである。

この道二先生について面白い話がある。

何しろ先生が江戸の真ん中で道話をはじめた時代は徳川の世盛り、士農工商の区別厳然たる時分だから、町人の分際を以て聖賢の道を説くなどとは以ての外のことと儒者達は反感を抱くし、武士階級はテンから馬鹿にしかかかったので、備前岡山の老候池田一心齋が、町人の似而非講釈、何程のことかある、吾が屋敷へ呼び出して試してみようと、使者を遣わして、道二の出講を請うた。

当時の備前公の勢い、道二も辞み難く、定刻に出頭すると、

『しばらくお控え下さい』

と一間へ通して、それっきり二時刻ばかりも待たした。其の一刻は今の二時間だから二時刻といえは四時間、人を呼び付けて置い

て四時間も待たすとは以ての外と思つたが、ここが辛抱だと道二先生我慢して居ると、

『どうぞ此方へ』

との案内に、いよいよこれからかと連れられて通ると、また別の間で、『暫時、お控え下さい』

と、ここでも二時刻ばかり待たされ、さすがの道二先生も堪忍袋の緒が切れようとしたが、

なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍するが堪忍

と辛抱して居ると、ようやく夕刻になって、

『どうぞ此方へ』

と案内せられて一間に入ると、老候は近臣相手の酒宴最中。

『今日は用事もないで、只今酒宴中じゃ、どうだ一杯やらんか。』

人を待たして置いて用事がなかったとは以ての外が無礼と思つたが、大名の我儘とグツト癩癩を抑えて、

『それがし、生来、御酒は不調法でござる』

と答えると、一心齋、威丈高に、

『ナニ酒は不調法だと、イヤ面白い、嫌なものに飲ますほど愉快なことはない。それッ』

と目くばせすると、近侍の者共、寄つてたかつて無理に盃持たせ、つごうとしたから酒は溢れて道二先生の衣服にかかる、今まで辛抱に辛抱を重ねて居た先生も、今は耐りかね、

『それがし、不肖ながら聖賢の道を講ずるものでござる。其者を呼び寄せながら、重ね重ねの御無体、かかる御人に道話をいたすは無益のこと、これにて御免蒙る』

と起ち上がると、かねて合図があつたと見えて居並ぶ近侍、奥女中皆な一様に手を打って、

『なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍するが堪忍』

とやったから、道二先生ハット気がつくつと、顔を真赤にして坐を正し、

『それがし、常に斯く教えながら身未だ行う能わず、なかなか人の前にて道を説くことの出来るものではござりませぬ』

と両手をついて平伏したのを見て、一心齋

『突嗟の場合に此の反省ある先生こそ、まことに道を説くの人。今までの無礼許してくれよ』

と、これから道を聴いたという。

昔の道話は実に苦心したもので、此苦心が現れて、幕末に至り心学道話は非常な隆盛をいたしたので、今日に遺る道話は大抵これらの人々によって伝えられたのである。

明治になってからは、此心学ばかりでなく、西洋の学問も取り入れられて一般民衆に対する道話訓話も、いろいろ行われるようになったのであるが、話す人も、聴く人も、身の行いにせずば、如何によい講義や演説をきいても、何の役にも立たぬ。

此点に於て、道二先生の逸話は、其儘これ『道の話』である。

古の道をきいても習うても

身の行いにせずば甲斐なし

修養に志す者、この心がけなくては、万卷を読破しても、真の修養は出来ぬ。

以上。この作品は、明らかに「道話篇」の序を兼ねる。そして作者の加藤咄堂は、本篇最多数の道話を執筆する。

これに対して、第三部「お伽噺篇」第一話、小川未明『赤い蠟燭と人魚』は、単なる名作にすぎず、本篇の序文としては用を為さない。また、ここに収められた小川未明の作品数は、菊池寛、濱田廣介と並び、2話

を超えない。その他の執筆者12名も、一人1話のみを担当する。この12名は、蘆屋蘆村と楠山正雄を含む。両名の担当話数は、「寓話篇」一位と二位である。

これらの事実から、編集の企図を、以下に推理する。

編者は、寓話を基礎とする「世界文学」の見取図を試作したらしい。

「寓話」とは、仮想現実(道徳観念)の表現形式、また人類最古かつ世界共通の文学である。ゆえに、その収集を第一とした。

「道話」とは、寓話(ないし譬喩)の亜種であり、現実処理(道徳実行)の説明形式として近世に発展する。ゆえに、その収集を第二とした。

「お伽噺」とは、寓話の形式を用いた近代文学作品である。ゆえに、その収集を第三とした。

以上。全体に少々杜撰な編集と言わざるを得ないが、ともかく近代日本文学界に活躍した人たちの参画した事業であるには違いない。昭和最初期の日本における海外文学の受容態度、また比較文学の混雑状況を再考するうえで、それなりに貴重な資料であろう。その一例として、『寓話道話 お伽噺』第一部「寓話篇」から、中村博道『黄金の壺』を、以下に提出する。原文を新字体新仮名遣いに改め、太字強調を加えた。

むかし、ある国の王様の王女に、学問をお教える大変えらい学者がありました。

学問に秀でてはいるばかりでなく、人格も頗る高潔な立派な人として、人々から非常な尊敬を集めて居りました。

然し、天二物を与えずで、この人、気の毒なことには至って病身で、身体は見るかげもなく痩せ衰え、手足も曲りくねった、まことに醜い姿をしておりました。

ある時、王女がこの先生に對つて云いました。

『先生、私は以前からいつも不思議に思っていることがあります、



今それをお訊ねしてもよろしゅう御座いますか」

『どうぞ、何なりとも。私にわかることなら御答え致します』

『先生は大変に学問もあり、才能もすぐれ、御人格もお立派でいらっしゃるのに、何故、そのように見苦しいお身体をして居られるのでございませうか』

と、王女は大変失礼な事を問いかけてました。

しかし、先生はそれには答えず、素知らぬ風で、

『お姫様、どうぞ病身な私に一つよい葡萄酒を戴かせて下さいませ』

そう申しますので、王女はすぐ侍女に命じて、葡萄酒を取寄せて、先生に飲ませました。

『おお、これは大変に結構なお酒でございますが、このような良いお酒は、一体、どのような甕に貯えておられますか』

先生の問いに対し、王女は、

『別に甕といって、ただ土で造った甕に容れてあります』

と、即座に答えました。

すると、先生は怪訝そうな面持ちで、

『それは飛んでもない。このような結構な御酒を土の甕なんぞに容れておくは、勿体ないことでございます。銀なり又金なりでこしらえた甕にお取換えなさるがよろしゅうございます』

と云うので、王女も成程そうだと、早速、取換えることになりました。

それから数日経ちました。学者はいつもの通り、王女のお稽古を終えると、

『どうか葡萄酒を一杯いただきとうございます』

と云って、葡萄酒を所望し、出された酒を飲みながら、じっと考えておりましたが、

『いや、これはいけない。非常にいやな匂いがいたします。一体、これはどうなされたのでございます』

と訊ねるので、王女も変に思い、

『先生が、黄金の甕に容れよと仰しかったので、早速入れかえたのですが……』

と、云うのを聞いて、先生はハタと手を拍って、

『ははア、それで解りました。酒はやはり土の甕でなくてはいけません。黄金の甕に容れたために、この通り味がわるくなったので御座いますよ。それと同じように、私もこのように身体が見苦しかったればこそ、学問も修められ、道徳も積まれたので御座います。これが黄金の甕の様であつたら、きつと虚栄に囚えられて、今頃は惨めな境遇にいたに違い御座いませぬ。王女様、これが、この前の御訊ねに対する私のお答えで御座います』

そう云って、しずかに笑いました。

以上。中村博道は、これの他に「寓話篇」1話、「道話篇」5話の執筆を担当した。この話数は、『寓話 道話 お伽噺』全篇で楠山正雄に次ぐ五位、「道話篇」で安藝愛山（喜代香）に次ぐ三位である。つまり、本書の編纂に割と深く関わった人、また、もともと寓話よりも道話を得意とした人らしい。が、経歴は一切不明である。講談社内の（資料書庫、著作権台帳を含む）検索機関にも情報は見当たらないという。日本文学史上、無名に等しい作家かもしれない。しかし、その作品は、比較文学上、なかなか面白い問題を提起する。

中村博道『黄金の甕』は、ひとつのユダヤ説話と、細部において奇妙な一致を見せるのである。

近代イスラエル文学を代表する詩人ハイム・ナハマン・ピアリク（一八七三—一九三四）と名編集者ヨシユア・ハナ・ラブニツキー（一八五

九一―一九四四)の共著『説話書』(一九〇三年初版)全六部のうち第

二部、第11章「賢者の故事」106番を、以下に引用する。原作のヘブライ語文を日本語に変換し、太字強調を加えた。

あるとき、帝の娘がハナニヤの子ヨシシア先生に言った、

「さても醜い器に麗しい知恵よのう。」

「父君は何に酒を貯めておられるか。」

「土の器じゃ。」

「世間では土の器ですが、皆様も土の器とは。」

「では何に貯める。」

「皆様の様に高貴な方々は、金銀の器に貯めなさいませ。」

姫は父君に言いつけて、酒を金銀の器に貯めたところが、酒は醜えた。

帝は姫に言った、「かようなことを誰が申した。」

「ハナニヤの子ヨシシア先生です。」

帝は先生を呼びつけて言った、「何故かようなことを申した。」

「姫様のおっしゃったことを、そのまま申し上げました。」

——美男の賢者もいるぞ。

——醜男ならば、もっと賢かったらう。

(「タアニート」七、「ネダリーム」五〇)

以上。文末括弧内は、説話の典故として、ユダヤ口伝教学大全『パビロニア・タルムード』「苦行篇」、同「誓願篇」の参照を指示する。

中村博道は、はたして実際にユダヤ説話を参照したか、それとも同趣の話の伝聞したか、あるいは独自に発想したか。

理論上、いずれの可能性も否定できない。成立過程を説明し得る証拠は存在しない。その場合の研究方法は、作品構造を観察する他ない。

この点を確認するための基本事実を、ここまで列挙した。作品構造の比較と観察を、次の課題とする。

## 注

(1) 飯郷友康「ソロモンの偽装 前篇・知見」『立教大学日本学研究所年報』14・15、立教大学日本学研究所、二〇一六年八月、同「ソロモンの偽装 後篇・裁断」『立教大学日本学研究所年報』17、立教大学日本学研究所、二〇一八年七月。

(2) 蘆谷蘆村「生没年、一八八六―一九四六」、『捕鳥者と鶉』「石ころのお話」『国に帰った商人』「獅子と鼠」『狐と烏』「獅子と狐と驢」『獅子の教育』「野放しの馬」『吝ん坊』「石と雨」『小石とダイヤモン』「野菜作りと学者」『狼と小羊』「鶯と鴉」『雲雀と百姓』「鶯と土鼠」『驟と盗賊』「馬と騎手」『獅子と狼と狐』「悪犬」『兎と葡萄の蔓』「乳搾りの娘」『象』「猿の庭番」『親猫と仔猫』「王様と医者」『四人の妻』「驢と驟」『病気の獅子』「狐と茨」『気短かな男』「二つの袋」(以上「寓話篇」)『ふしぎな麦束』(「お伽斬篇」)。

(3) 新山泰治「未詳」『風』「やどかり蟹」『たった一日の違い』『昇天した水』『立場立場の見方』『臭いもの身知らず』『蛸の求婚』(以上「寓話篇」)『父の悔悟』『どうして富を得たか』『天使の手』『宝生弥五郎血塗の面』『姥捨山』「人形の聴衆」『恩を知らぬ鰐』(以上「道話篇」)。

(4) 加藤咄堂「一八七〇―一九四九」『道話の由来』「道とは何じゃ」『毒薬変じて良薬となる(道二翁道話より)』「悪人仏性」『鹿に聞かれる』「鴨居と闕(続鳩翁道話より)』「ものの用い方(民の繁栄より)』「悪者ぞろい」『稀代の禁厭』「物は考えよう」『堪忍袋売捌所』「二番大事な宝物」『獵師の時計』(以上「道話篇」)。

(5) 楠山正雄「二八八四―一九五〇」『百姓と林檎の木』「水車屋の父子と驢馬」『蟻とキリギリス』「喧嘩は損」『北風と太陽』「百姓と息子」『旅人と篠懸樹』(以上「寓話篇」)『イワンの馬鹿(トルストイ

原著)〔お伽噺篇〕。

- (6) 中村博道「未詳」『黄金の甕』「信と不信」(以上「寓話篇」)「二人の商人」『珍裁判』『豆腐問答』『駱駝の首』「ともしび」(以上「道話篇」)。

- (7) 加藤峻「未詳」『河と小石』「角力の一手」(以上「寓話篇」)「幽王と小野小町」『鰐と猿』「御礼の先取り」(以上「道話篇」)。

- (8) 藤村一郎「未詳」『提灯』(「寓話篇」)「晴着(菘翁道話より)」『お守役』「孝行嫁」(以上「道話篇」)。

- (9) 尾關岩二「二八九六―一九八〇」『あうむの歌』「火食鳥と家鴨」『こおろぎとおけら』(以上「寓話篇」)。

- (10) 安藝愛山「喜代香。一八五七―一九二二」『婁師徳の教』「盲人の象探り」『手足問答』(以上「道話篇」)。ただし後注20を見よ。

- (11) 小川未明「二八八二―一九六一」『赤い蠟燭と人魚』「天下一品」(以上「お伽噺篇」)。

- (12) 菊池寛「二八八八―一九四八」『三人兄弟』「八太郎の鷺」(以上「お伽噺篇」)。

- (13) 濱田廣介「二八九三―一九七三」『光の星』「三日目の椎の実」(以上「お伽噺篇」)。

- (14) 赤松月船「二八九七―一九九七」『流るる大木』、芥川龍之介「八九二―一九二七」『蛙』、木村泰賢「一八八一―一九三〇」『門番物語』、野邊地天馬「二八八五―一九六五」『公爵の白兔』、松村武雄「二八八三―一九六九」『友達の力』(以上「寓話篇」)。

- (15) 東胤徳「未詳」『不思議な広告』、小酒井不木「二八九〇―一九二九」『餅二題』、高島米峰「一八七五―一九四九」『金が溜ったら(百喻経より)』、中尾未承「未詳」『山上の人』、眞下醒客「未詳」『幽霊と炒豆(ある仏話集より)』、本山荻舟「一八八一―一九五八」『二子

得失(遠羅天釜より)』、八波則吉「一八七五―一九五三」『鯉の教訓』、山中峯太郎「二八八五―一九六六」『心の関守(鳩翁道話より)』(以上「道話篇」)。

- (16) 秋庭俊彦「二八八五―一九六五」『豆の花』、安倍季雄「二八八〇―一九六二」『お母さんの写真』、大木雄三「二八九五―一九六三」『旅の螢』、奥野庄太郎「二八八六―一九六七」『親兔と子兔』、大原麟太郎「未詳」『王様の試験』、甲斐静也「未詳」『蟹満寺』、北村壽夫「一八九五―一九八二」『狼と小羊』、清見陸郎「二八九六―?」『不思議な練葉』、久米元一「一九〇二―一九七九」『二人巡礼』、千葉省三「二八九二―一九七五」『盲人と小犬』(以上「お伽噺篇」)。

- (17) 題名『樹を切つて美果を求む』「人身御供」『美味しい胡麻』『麦畑と息子』『弱者の同盟』『夫婦鳩』『王女の成長』『肉を切り取られた男』『医者の子』『米を盗み食ひした男』『言葉と実際』『瓶を造るを見る』。以上の出典「百喻経」は、漢訳仏典『百句譬喻経』の異名。

- (18) 題名『鶴と蝦』『盲目の旅人』『植木屋と熊』『青い山犬』『坊さんと鷹と鴉』『鹿と獅子』。以上の出典「ヴィシヌヌ・サルマン物語」は、古代インド説話集『パンチャタントラ』の異名。

- (19) 題名『葡萄園の労働者』。出典「新約聖書馬太伝」は、新約聖書『マタイ伝福音書』の略称。

- (20) 『命の値』『一杯の水』『家光公の体験』『日輝上人の慈悲』『天狗の馬』『仮名違い』。出典『通俗教育道話』の著者、安芸喜代香は、安藝愛山の本名。ゆえに、彼の担当話数は、事実上、「道話篇」の9話。

- (21) 『芝居』『掴んだ金平糖』『縄からげの駕籠』。以上、原作者は江戸期の心学者、柴田鳩翁「二七八三―一八三九」。

- (22) 『堪忍六助』『蟻の教訓』『朝起大菩薩』。以上、原作者は江戸期の心学者、脇坂義堂「?―一八一八」。

- (23) 『ユビテルと馬』『獣の会談』『ヘルキュリーズ』『小人の贈物』。原作ゴットホルト・エフライム・レッツィング「一七二九—一七八一」『寓話集』（一七五九年刊行）より。
- (24) 『木の葉の独立』。原作フォードル・ソログープ「一八六三—一八二七」『芳名』（一九一五）より。
- (25) 『狼と猫』。原作イヴァン・アンドレーヴィチ・クルイロフ「一七六九—一八四四」『寓話集』八19（二八四—三）。内海周平訳『完訳クルイロフ寓話集』（岩波文庫、一九九三年、二六八頁）参照。
- (26) 『警めの火』。原作マーガレット・ガッティ「一八〇九—一八七三」『自然寓話集（原題 *Parables from Nature*）』より「真理の火」（『*The Light of Truth*』）（一八五九）。ガッティについては、松田美作子『Margaret Gatty, *Parables from Nature* とヴィクトリア朝期エンブレムの復興——“A Lesson of Faith”を中心に』（『英文学専攻紀要』40、成城大学大学院文学研究科、二〇〇八年、四〇七—四二三頁）に教えられた。
- (27) 『鴛鳥の自慢』。原作クルイロフ『寓話集』三19「鴛鳥たち」（前注25、内海訳、一〇八頁参照）。
- (28) 『寸法書』。原作『韓非子』「外儲説左上」より忘「持」度の故事。諸橋轍次『中国古典名言事典』（講談社文庫、一九七九年）参照。
- (29) 『奴隸と獅子』。原作アウルス・ゲリウス「一二五頃—一八〇頃」『アッティカ夜話』五14。大西英文訳『アッティカの夜』1（京都大学学術出版会、二〇一六年）参照。
- (30) 『牧童と野山羊』『子供と草』『牝山羊の髻』『子供と蛙』『二人の旅人と斧』『屋根にのぼった驢』『木像を運んだ驢』。取材源は、ジョージ・ファイラー・タウンゼント「一八一四—一九〇〇」編訳『イソップ寓話集』（一八六七）の第58話、第61話、第281話、第52話、

第118話、第117話、第112話か（タウンゼント自身は、寓話の二々に題名のみを付け、通し番号を振らなかった。原著初版の写影はインターネット上に閲覧可能、<https://archive.org/details/threehundredeso0/Oaesouft/page/n5>。ハナマタカシ「タウンゼント版イソップ寓話集 日本語訳」参照、<http://esopofable.blogspot.com/2015/06/townsend.html>）。いわゆる「イソップ寓話」の定義は極めて複雑な問題であるので、別途に考証を要する。小堀桂一郎『イソップ寓話 その伝承と変容』（中公新書、一九七八年）、中務哲郎『イソップ寓話の世界』（ちくま新書、一九九六年）、同『イソップ寓話集』（岩波文庫、一九九九年）参照。

(31) 前注2参照。そもそも、蘆谷蘆村の担当した「寓話篇」32話のうち13話（『獅子と鼠』『狐と鳥』『獅子と狐と驢』『狼と小羊』『鴛と鴉』『雲雀と百姓』『驛と盗賊』『獅子と狼と狐』『悪犬』『乳搾りの娘』『驢と騾』『病気の獅子』『二つの袋』）は明らかにタウンゼント版イソップ4番、95番、160番、1番、250番、202番、299番、236番、59番、122番、50番、39番、256番の再話、また5話（『獅子の教育』『小石とダイヤモンド』『鴛と土鼠』『馬と騎手』『象』）はクルイロフ『寓話集』三12、七3、三21、四17、五19の翻案であろう。

(32) 講談社広報室の調査報告による（飯郷友康の電話質問に対する文書回答、二〇一四年一月二九日付メール）。調査担当の田中民男氏に、この場を借りて深く感謝する。

(33) *Sefer ha-Aggadah* [Hebrew], 3vols. (Tel-Aviv: Dvir, 1946) を使用した。英訳あり、Hayim Nahman Bialik and Yehoshua Hana Ravnitzky, eds., trans. by William G. Braude, *The Book of Legends: Sefer Ha-Aggadah* (New York: Schocken Books Inc., 1992)。

(34) ユダヤ口頭伝承および教学大全タルムードについては、すでに他



所で概観した。飯郷友康「善男と幽霊——中世ユダヤ説話解釈の一例——」『立教大学日本学研究所年報』12（立教大学日本学研究所、二〇一四年七月）、同「ユダヤ教の《旧約聖書》《タルムード》」『大法輪』6（大法輪閣、二〇一五年六月）、同「律法の門前 第1回…タルムードの輪郭」『関東神学ゼミナール通信』63（関東神学ゼミナール、二〇一六年六月）。なお、市川裕『ユダヤ人とユダヤ教』（岩波新書、二〇一九年、九四―一〇〇頁）と比較せよ。

（いいこうともやす 立教大学兼任講師）